

新生児マス・スクリーニングで発見されたヒスチジン血症における精神運動発達について

日本大学医学部小児科

北 川 照 男

新生児マス・スクリーニングで発見された14例および生後10ヶ月で偶然発見された1例、計15例のヒスチジン血症の身体並びに精神運動発達について5～15ヶ月間、追跡を行った。早期発見例14例中12例は、空腹時血中ヒスチジン値が8～12 mg/dlで、L-ヒスチジン負テストの結果から、低ヒスチジンミルクによる治療を行った。残りの2例は、空腹時血中ヒスチジン値が5～6 mg/dlで、負荷テストにおける異常が軽度であったため、治療を行わずに経過を観察した。また、生後10ヶ月時に偶然発見された症例については、負荷テストの結果から、低ヒスチジン食を開始した。各々の症例は、2週間に1回Guthrie法により血中ヒスチジンを測定し、3ヶ月に1回、血清アミノ酸分析、血液一般検査、血清蛋白分画、および肝機能などの検査を行い、月に1回、身体計測を行った。

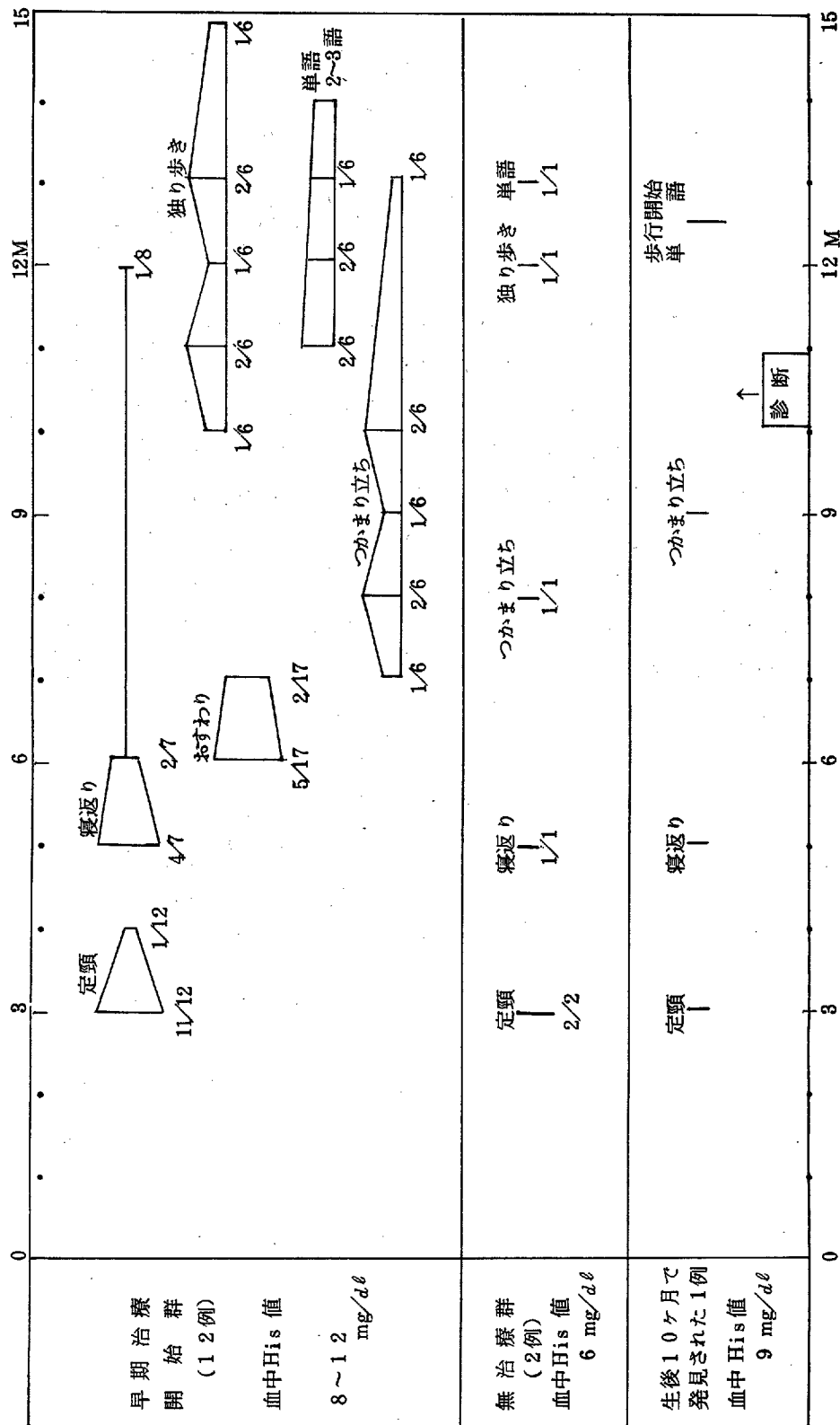
その結果、全例において血中ヒスチジン値は3～6 mg/dlに維持され、血液の諸検査においても異常は示されず、身長、体重、頭囲などの身体発達にも異常は認められなかった。

15症例の運動並びに精神発達は図の如くであり、早期治療群中1例の女兒に寝返りの遅れがみられたが、定頭、おすわり、独り歩きにおいては全例が正常範囲の発達を示し、発語にも遅れは認められていない。無治療例2症においても、現在のところ発達遅延は認められていない。生後10ヶ月で発見された1例の、10ヶ月までの発達は全く正常であり、低ヒスチジン食開始後の発達も順調である。

低ヒスチジンミルクを投与した13例のヒスチジン血症の発達は良好であったが、無治療の場合の自然経過の成績が十分に得られていない。したがって、治療効果の評価については慎重である必要があり、更に長期予後について検討する予定である。

図 新生児マス・スクリーニングで発見されたヒスタジン血症における発達

(S52年8月~S54年1月現在 日大小児科)



↓
検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります
↓

新生児マス・スタリーニングで発見された 14 例および生後 10 ヶ月で偶然発見された 1 例、計 15 例のヒスチジン血症の身体並びに精神運動発達について 5~15 ヶ月間、追跡を行った。早期発見例 14 例中 12 例は、空腹時血中ヒスチジン値が 8~12mg/dl で、L-ヒスチジン負テストの結果から、低ヒスチジンミルクによる治療を行った。残りの 2 例は、空腹時血中ヒスチジン値が 5~6mg/dl で、負荷テストにおける異常が軽度であったため、治療を行わずに経過を観察した。また、生後 10 ヶ月時に偶然発見された症例については、負荷テストの結果から、低ヒスチジン食を開始した。各々の症例は、2 週間に 1 回 Guthrie 法により血中ヒスチジンを測定し、3 ヶ月に 1 回、血清アミノ酸分析、血液一般検査、血清蛋白分画、および肝機能などの検査を行い、月に 1 回、身体計測を行った。